

口永良部島の火山活動解説資料（平成 21 年 11 月）

福岡管区气象台
火山監視・情報センター
鹿児島地方气象台

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、新岳^{しんだけ}火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められませんが、火口内では火山灰等の噴出する可能性があります。また、火口付近では火山ガスに対する注意が必要です。

平成 21 年 10 月 30 日に噴火予報（噴火警戒レベル 1、平常）を発表しました。その後、予報警報事項に変更はありません。

○ 11 月の活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図 3、図 5）

新岳^{しんだけ}の噴煙活動は低調な状態で、白色の噴煙が時々観測されました。最高高度は火口縁上 200 m でした。

26 日に第十管区海上保安本部が行った上空からの観測では、新岳火口及びその周辺の状況に大きな変化はなく、新岳火口から白色の噴煙が上がっているのが確認されました。

・地震や微動の発生状況（図 2、図 3）

火山性地震は少ない状態で経過し、月回数は 136 回（10 月：131 回）でした。震源は主に新岳火口直下のごく浅いところに分布し、これまでと比べて変化はありませんでした。

火山性微動は少ない状態で経過しました。月回数は 2 回（10 月：32 回）で、前月と比べて減少しました。

・地殻変動の状況（図 3、図 4）

GPS 連続観測では、2008 年 9 月から続いていた新岳火口浅部の膨張を示す変化は、2009 年 6 月以降認められなくなり、その後、特段の変化はありません。

・火山ガスの状況（図 3）

2 日、3 日及び 28 日に独立行政法人産業技術総合研究所及び京都大学が行なった火山ガスの観測では、二酸化硫黄の放出量は一日あたり 100 トン未満と少ない状態でした。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ（<http://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>）や気象庁ホームページ（<http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/volcano.html>）でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（平成 21 年 12 月分）は平成 22 年 1 月 8 日に発表する予定です。

※この資料は気象庁のほか、海上保安庁、国土地理院、京都大学及び独立行政法人産業技術総合研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』を使用しています（承認番号：平 20 業使、第 385 号）。

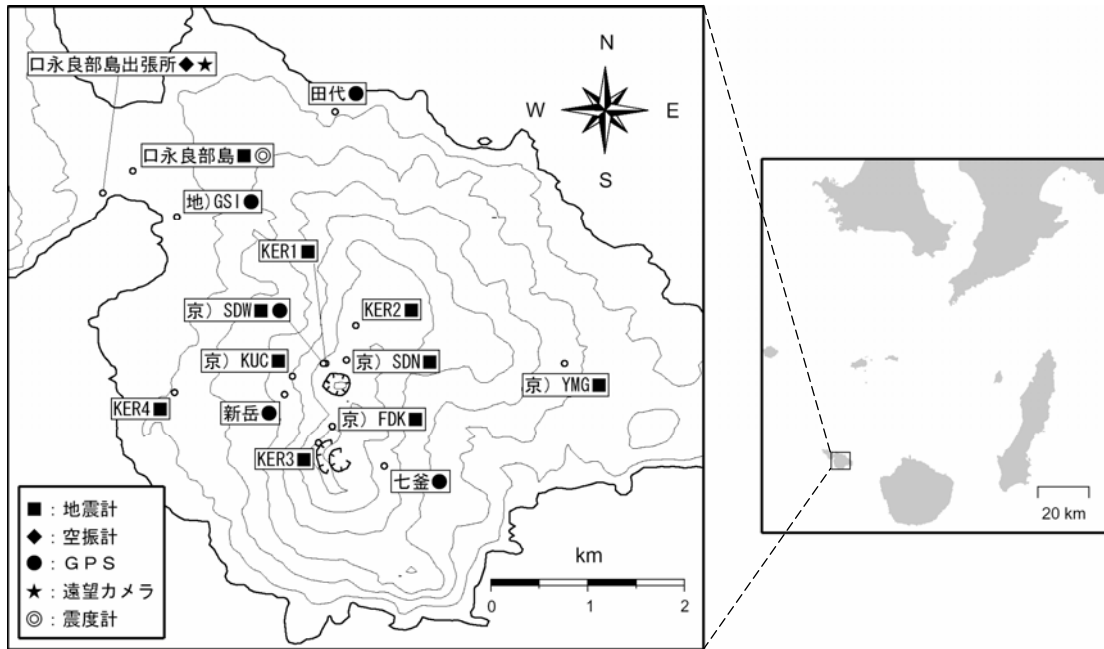
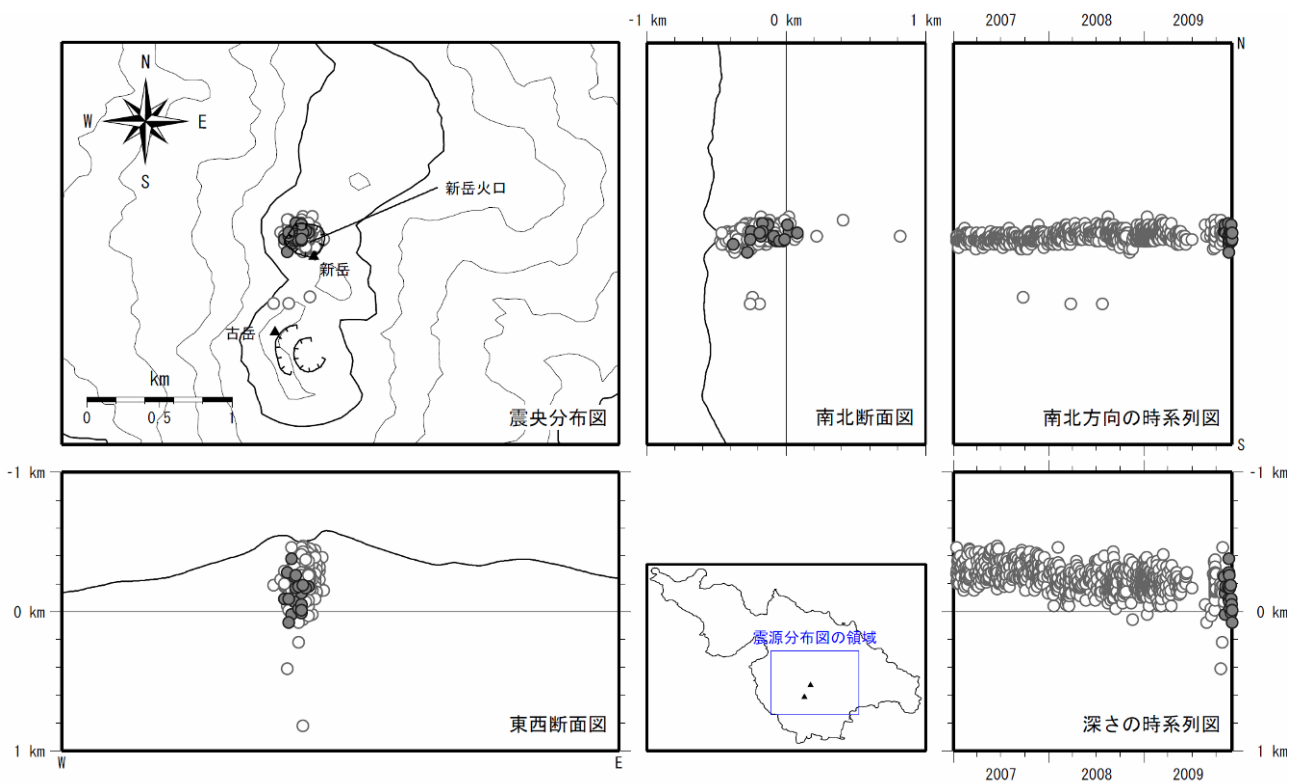


図 1 口永良部島 観測点配置図



- : 2009 年 11 月の震源
- : 2007 年 1 月～2009 年 10 月の震源

図 2※ 口永良部島 震源分布図（2007 年 1 月～2009 年 11 月）

<11 月の活動状況>

火山性地震の震源はこれまでと同様、主に新岳火口直下のごく浅いところに分布しました。

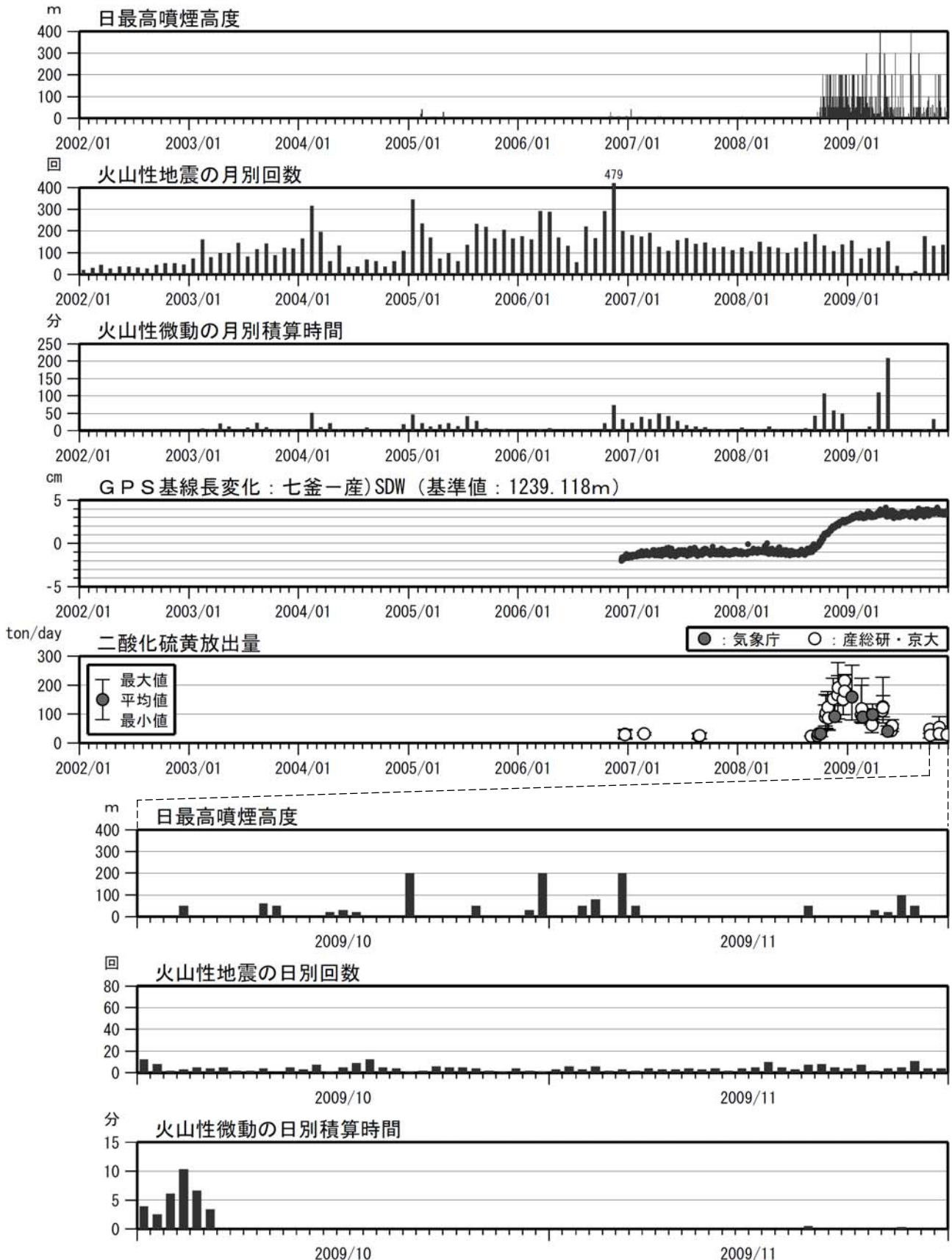


図 3※ 口永良部島 火山活動経過図（2002 年 1 月～2009 年 11 月）

<11 月の活動状況>

- ・白色の噴煙が時々観測（最高高度は 200m）されました。
- ・火山性地震は少ない状態で経過し、月回数は 136 回（10 月：131 回）でした。
- ・火山性微動は少ない状態で経過し、月回数は 2 回（10 月：32 回）でした。
- ・2 日、3 日及び 28 日に独立行政法人産業技術総合研究所及び京都大学が行なった火山ガスの観測では、二酸化硫黄の放出量は一日あたり 100 トン未満と少ない状態でした。

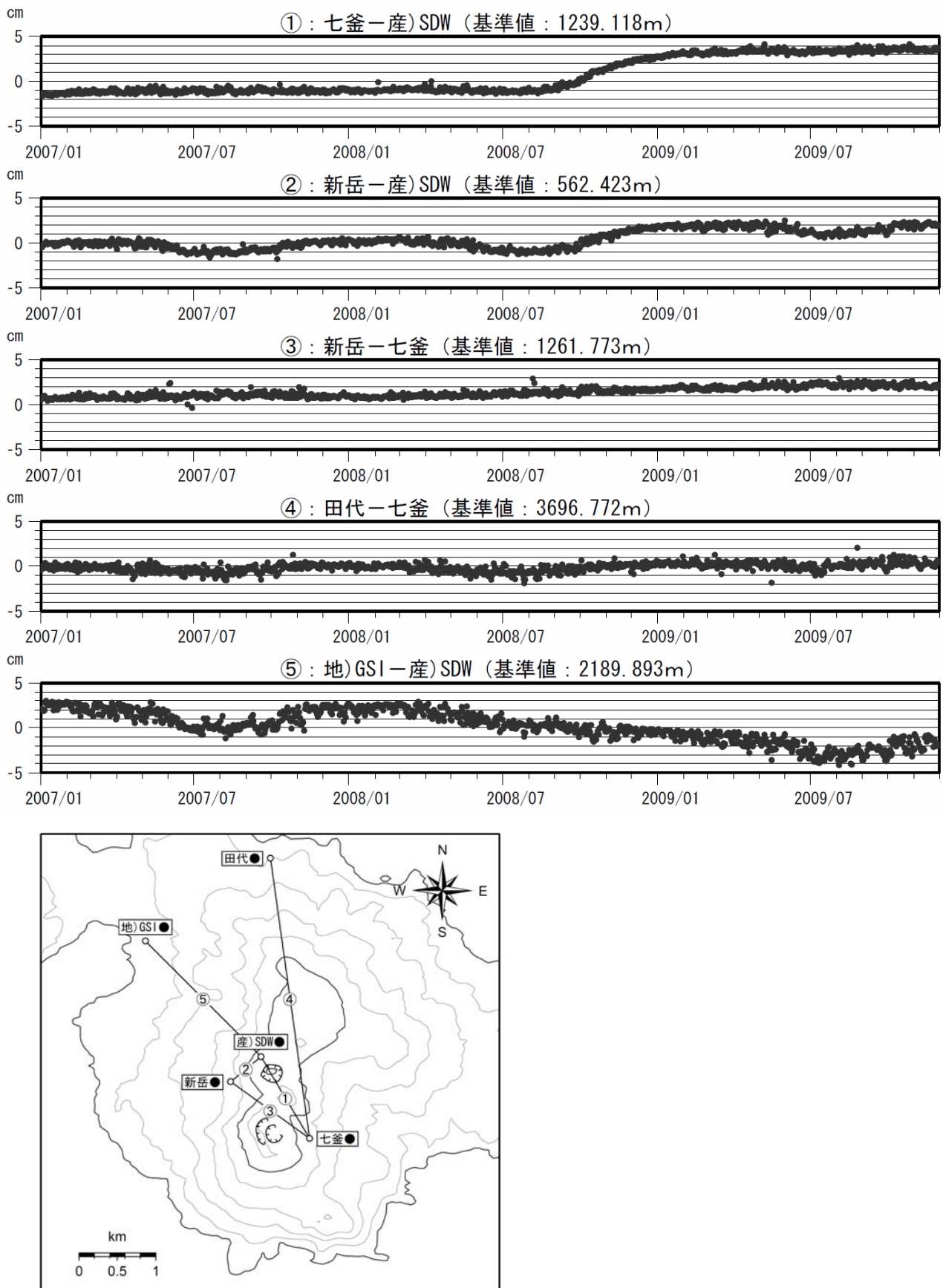


図 4※ 口永良部島 GPS 連続観測による基線長変化 (2007 年 1 月~2009 年 11 月)

2008 年 9 月から続いていた新岳火口浅部の膨張を示す変化は、2009 年 6 月以降認められなくなり、その後、特段の変化はありません。

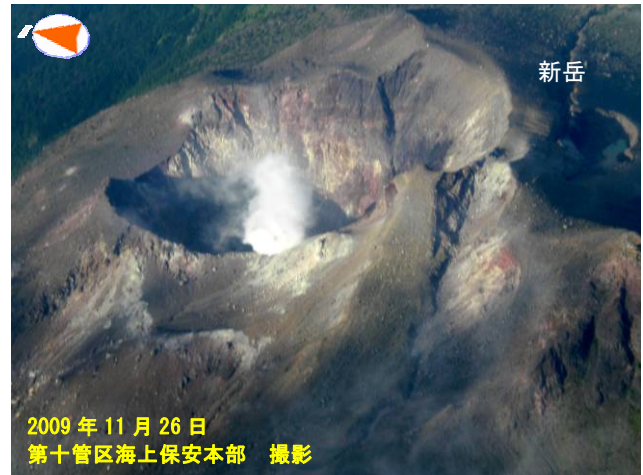
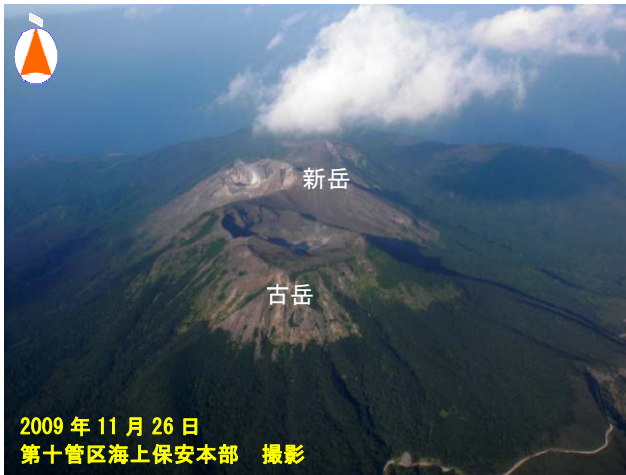


図5※ 口永良部島 上空からの観測（写真左：南側上空から撮影、写真右：西側上空から撮影）
26日に第十管区海上保安本部が行った上空からの観測では、新岳火口及びその周辺の状態に大きな変化はなく、新岳火口から白色の噴煙が上がっているのが確認されました。